

大地はいえとなり、いえは大地となる

大地のすぐ上に住むわたしたち
 だけど大地はわたしたちの暮らしから離れたもの
 近いけれど遠いもの
 その大地をいえのなかにとりこんでみる
 土がいえの中を循環する
 そうして家は呼吸をはじめ
 常に刻々と変化する日々の暮らし
 かつて暮らしが土とともにあった焼き物の街、益子町
 そこに土により呼吸する家を提案する

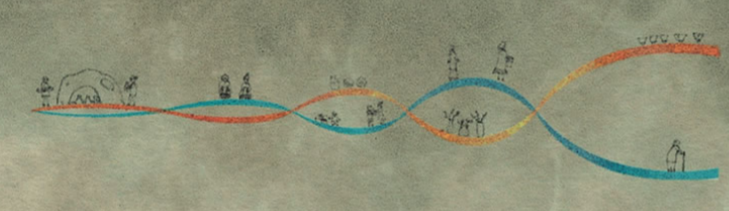


焼き物の街 - 栃木県益子町



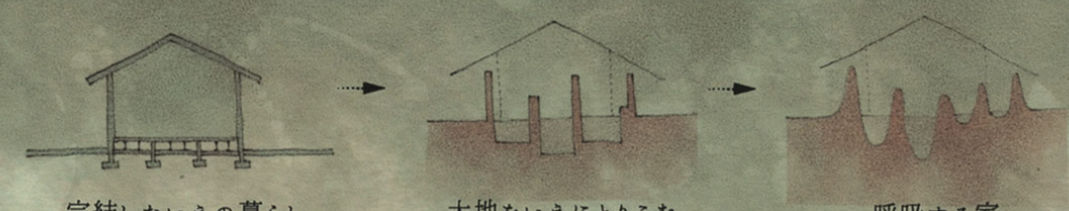
敷地は江戸時代から焼き物の町として栄えた、栃木県益子町です。この町は益子焼により全国的に有名となり、観光地として栄えてきました。窯業は町を支える重要な産業で、約300の窯元が存在しています。他にも農業が有名であり、この町には古くから手作りの文化が根付いてきました。このように益子町は土と生活が深く結びつき、土とともに歩んできた町です。

土と離れた人の暮らし



近年焼き物の需要が低下し、窯業は衰退傾向にあります。その背景にあるのは大量生産・大量消費の現代社会の流れです。それに加え、益子町では少子高齢化、人口減少、都心部への若年層の人口流出が進んでいます。その影響で焼き物を代表とする益子町の地域力は減退し、日常の人の暮らしから土が離れたものとなっています。都市部にはない、手作りの温かみのある焼き物の魅力を益子町から発信していくきっかけをつくる必要はないでしょうか？

土とともに生きること



現代のいえは外部に対して閉じ、他者が入り込むことを遮断しています。快適さを求め、日常の生活はいえの中で完結し、変化のないものとなっています。いえは大地の上にあります。いえと大地の間に関係性はありません。

土とともに歩んできた益子町に、土の建築を提案します。土を家の中に取り込み、移動・交換することにより新たな空間が生まれます。土が日常の暮らしに変化を生みきっかけとなります。

暮らしに対応した土の建築

土壁に囲まれた空間が変化を許容します。いえの中の小さなくぼみをきっかけに変化が生まれます。

plan scale:500

phase1
 家族構成：夫婦、子供2人の4人家族です
 夫：陶芸家。手作りの益子焼を販売する妻と、ガーデニングが好きな専業主婦。奥男：絵をかくのが好きな小学1年生。次男：3歳児。ピアノをはじめる

phase2
 益子焼を販売するお店をついた益子焼を介して地域とつながるスペースをついた小さな二人の子供のための部屋をついた夫婦仲よく一つの家庭。奥の書斎もできたリビングには落ち着くスペースができた

phase3
 手作りの焼き物の魅力を発信したいと思い、空間を拡張しながら、畳り窯を内蔵した陶芸体験のスペースをついた夫婦の発達にあった中庭は子供の遊び場にしよう夫は自分の書斎を拡張した。リビングも少し広くなった大きなお風呂がはじり、お風呂を拡張した

phase4
 土を介していえ、ひと、まちがつながるもっと多くの人に焼き物の魅力を発信するために陶芸体験のスペースをさらに拡張した。リビングを拡張し地域の人が集まることのできるイベントスペースをついた大きくなった次男のためにもうひとつ子供部屋をついた

